

(13) 地球惑星科学教育部会

教育部会名	地球惑星科学								
部会長名／作成者名	島伸和								
概 要 (2 ページ)									
(1) 組織・運営について ・部会構成、実施体制など 2023 年 4 月の時点での地球惑星科学教育部会の構成員は 19 名で、それぞれの所属は次のとおりである。 <table> <tr> <td>・理学研究科</td><td>14 名</td></tr> <tr> <td>・人間発達環境学研究科</td><td>1 名</td></tr> <tr> <td>・都市安全研究センター</td><td>2 名</td></tr> <tr> <td>・海洋底探査センター</td><td>2 名</td></tr> </table> 2016 年 4 月の時点での構成員は 23 名だった。その後、定年・異動等により構成員でなくなったものが 10 名、新たに構成員になったものが 6 名で、4 名もの減員になっている。さらに、構成員の入れ替わりの割合も比較的高い。このような状況があり、現在、部会構成員の適切な授業負担のために、3 名の非常勤教員（専門基礎科目および基礎教養科目担当）を加えた体制で授業を行っている。 部会の運営は、「地球惑星科学教育部会の運営に関する申し合わせ（2013 年 2 月 28 日一部改正）」により、部会長と 1 名の幹事で行うことになっている。2018 年度からは部会長が 2 年、前部会長が幹事を 1 年担当した後、次期部会長が幹事を 1 年担当する。部会長および幹事が全体を統括する体制をとっている。 特に大きな変化としては、2022 年度まで全学教育科目として実施していた地学実験 A・B を、今年度から理学部専門科目として開講したことである。この科目には、地球惑星科学教育部会の構成員の多くが関わっており、この科目を含めて部会での実施体制の見直しを行った。 ・開講科目、カリキュラムなど 2023 年度に当部会で開講した授業科目は以下のとおりである。 専門基礎科目：基礎地学 1(前期 1Q)、基礎地学 2(前期 2Q) 基礎教養科目：惑星学 C(前期 1Q×1、前期 2Q×2、後期 3Q×2、後期 4Q×1) 惑星学 D(前期 1Q×2、前期 2Q×1、後期 3Q×1、後期 4Q×2) ・今年度の工夫・改善点 特に大きな工夫・改善点は認識されていないが、授業振り返りアンケートをもとに、継続して授業内容、授業方法の改善を行っている。また、来年度の 1 年生から、惑星学 C、D の科目名を惑星学 A、B と変更し、この名称変更を学年進行で行うことで、不自然な科目の名称を解消することを決めた。 ・現状と評価 基礎教養科目として、惑星学 C、D として開講している。この 2 区分にあわせて、授業担当者を 2 グループに分けて適材適所の配置を行った。専門基礎科目である基礎地学 1、2 は、専門基礎科目としての内容に沿った内容であることを配慮している。授業の振り返りアンケート結果では、ほとんどの講義において、「有益な授業であったか」という問いに、約 7 割またそれ以上で有益と評価する回答となり、講義担当配置および講義設計は適切であったと判断できる。一方で、一部の講義では、良く理解ができている学生とほとんど理解できていない学生という 2 極化の傾向が成績にあらわれている講義もあるが、現状において特に重視する傾向とは判断しない。		・理学研究科	14 名	・人間発達環境学研究科	1 名	・都市安全研究センター	2 名	・海洋底探査センター	2 名
・理学研究科	14 名								
・人間発達環境学研究科	1 名								
・都市安全研究センター	2 名								
・海洋底探査センター	2 名								

(3) 課題について

- ・教育部会及び教養教育院における今後の課題

部会の構成員の入れ替わりの割合がこれまでも比較的高いが、今年度中および年度末には構成員の転出と定年退職があり、さらに来年度には構成員の部局長への就任および産休・育休による休職の予定もある。このような状況であっても、本部会が担当する授業の実施体制を適切な状態に保つことが現時点での課題である。

(4) 総合所見

- ・全体としてのまとめ

基礎教養科目として、惑星学 C、D を合計 12 クォーターコマ開講した。部会の構成員の専門分野を勘案して配置を行い、共通シラバスに拠った内容の講義を提供した。共通専門科目の講義は、ベテランの非常勤講師が担当している。その結果、授業の感想としては、一定の評価を多く得ている。現状において限られたマンパワーとクォーター制の制約の中で最良レベルの講義を提供できていると考えている。

A 組織構成と運営体制について

- ①基本的な組織構成が適切であり、実施体制・運営体制が適切に整備され、機能しているか (100 字程度)

2023 年度は、部会構成員 19 名に非常勤講師 3 名を加えて専門基礎科目と基礎教養科目を支え、部会長および幹事が全体を統括する体制をとることで部会全体として機能させた。

根拠資料

教育部会構成員名簿、教員連絡表

B 内部質保証について

- ①学生を含む関係者等からの意見を体系的、継続的に収集、分析し、その意見を反映した取組を組織的に行っているか (100 字程度)

各授業担当者は、成績分布や学生の授業振り返りアンケートの結果を参照して、自己点検・評価を行い、部会長がそれを取りまとめて各年度の報告書を作成することを継続している。

根拠資料

授業振り返りアンケート結果、本報告書及び「【様式 2】自己点検・評価シート（全学共通授業科目等担当教員用）集計表」

- ②自己点検・評価によって確認された問題点を改善するための対応措置を講じ、計画された取組が成果をあげている、又は計画された取組の進捗が確認されている、あるいは、取組の計画に着手していることが確認されているか (150 字程度)

特に大きな改善点は認識されていないが、授業振り返りアンケートをもとに、継続して授業内容、授業方法の改善を行っている。

根拠資料

授業振り返りアンケート結果、前年度までの自己点検・評価報告書、シラバス（今年度の工夫）

- ③授業の内容及び方法の改善を図るための F D を組織的に実施しているか (100 字程度)

部会構成員は、教養教育院評価・F D 専門委員会が実施するピアレビューに個別に参加し、授業内容および方法の改善を図っている。部会として F D を組織的に実施することはない。

根拠資料

(FDを組織的に実施していないので) なし

- ④教育活動を展開するために必要な教育支援者や教育補助者が配置され、適切に活用されるときともに、それらの者が担当する業務に応じて、研修の実施など必要な質の維持、向上を図る取組を組織的に実施しているか(100字程度)

講義などには、TAを配置することができず、教員の負担増大につながっているが、部会として教育支援者や教育補助者の配置を組織的には行っていない。

根拠資料

(組織的に実施していないので) なし

C 教育課程と学習成果について

- ①当該教育部会が提供する授業の目標が、全学共通授業科目の区分ごとの学修目標に対応したものとなっているか(100字程度)

各授業の目標は、全学共通授業科目区分ごとの学修目標に沿ったものになっている。

根拠資料

シラバス

- ②授業担当者に共通目標や学部からの要請を示し、到達目標をそれに沿ったものにする配慮がなされているか(100字程度)

共通目標は授業担当者に周知されており、各科目のシラバスに反映されている。

根拠資料

シラバス

- ③授業科目の内容が、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなっているか(100字程度)

授業科目の内容は、共通目標や個々の到達目標を達成するものとなるように作成している。

根拠資料

シラバス

- ④単位の実質化への配慮がなされているか(100字程度)

それぞれの科目で、シラバスに講義の実施内容・スケジュールおよび成績評価方法について説明している。また、小テストやレポート、期末試験などを課し、各学生の理解度を確認している。

根拠資料

シラバス、配布資料、小テスト、課題

- ⑤教育の目標に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組み合わせ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学修指導法の工夫がなされているか(150字程度)

各学部教育の基礎となる部分が少ないため、演習は設定していない。受講者は高校で地学を履修していないことを前提に、多くの授業で配布資料を準備し、小テストを行う授業もある。

根拠資料

シラバス、配布資料、小テスト

- ⑥シラバスに、必須項目として「授業名、担当教員名、授業のテーマ、授業の到達目標、授

業形態、授業の概要と計画、成績評価方法、成績評価基準、履修上の注意（関連科目情報）、事前・事後学修」及び「教科書又は参考文献」が記載されており、学生が書く授業科目の準備学修等を進めるための基本となるものとして、全項目について記入されているか（50 字程度）

全項目について記入されている。

根拠資料
シラバス

⑦学生のニーズに応え得る履修指導の体制を組織として整備し、指導、助言が行われているか（100 字程度）

各々の授業科目では、シラバスに教員の連絡先などの情報を記載し、授業前後だけでなくメールや BEEF+を通じた質問等に対応するように申し合わせている。

根拠資料
シラバス、BEEF+

⑧学生のニーズに応え得る学習相談の体制を整備し、助言、支援が行われているか（100 字程度）

シラバスに教員の連絡先を記しており、授業前後だけでなくメールや BEEF+も活用して、学生からの質問等に対応している。

根拠資料
シラバス、BEEF+

⑨成績評価基準及び成績評価方針に従って、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか（100 字程度）

講義中に課したレポートや小テスト、また期末試験などを厳正に評価して単位を認定している。当部会の授業は、「基礎地学」を除いて複数名の教員で担当しており、成績評価も担当者全員の評価を集計して決めているため、必然的に教員相互に成績評価のチェックがなされるようになっている。

根拠資料
シラバス、試験答案、成績分布（教養教育委員会資料）

⑩学修目標に従って、適切な学修成果が得られているか（100 字程度）

成績評価の分布に偏った傾向はない。授業振り返りアンケートでは、回答率が 10%台のものもあり判断するのは難しいが、総合評価ではマイナス評価の割合はごく少なく、学修成果は適切な範囲内であろう。

根拠資料
試験答案、レポート、成績分布（教養教育委員会資料）、授業振り返りアンケート結果